

# 早稲田社会学会ニュース 第25号

2005年4月15日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: socio-office@list.waseda.jp

URL: <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

## 今回のニュースの内容

1. 第57回早稲田社会学会大会および総会開催のお知らせ
2. 本年度大会シンポジウムについて
3. 大会一般報告および『社会学年誌』第47号投稿の募集
4. 2005年度研究助成の募集
5. 第24回研究例会報告
6. 第25回研究例会開催のお知らせ
7. 第26回研究例会開催のお知らせ
8. 入退会者のお知らせ
9. 学会費納入のお願い

### 1. 第57回早稲田社会学会大会および総会開催のお知らせ

本年度の早稲田社会学会大会および総会が、2005年7月2日(土)に、早稲田大学文学部36号館681教室において開催されます。シンポジウムのテーマは「地域空間における共同性」です。詳細につきましては次項「本年度大会シンポジウムについて」をご参照ください。一般報告などを含むプログラムの詳細につきましては、6月中旬にお知らせする予定です。

事務局では大会での一般報告を募集いたします。報告を希望される方は、第3項をご参照のうえ、事務局宛てに郵送でお申込みください。

### 2. 本年度大会シンポジウムについて

テーマ：地域空間における共同性

<趣旨説明>

2003年度(テーマ「社会学のアルケオロジー——社会学の起源を問う」)と2004年度(テーマ「『社会』の蒸発・液化化する社会の諸相」)の2回の大会シンポジウム、ならびにそのプレ企画として行った研究例会では、「これまで社会学が分析対象として自明視してきた『社会』が、いま溶解しつつあるのではないか。『社会』とは何かということに関して、いま社会構成員たちは共通するイメージを思い描けていない<sup>(1)</sup>」という認識のもとで行われた。これらの機会を通じてさまざまな議論が交わされたが、その中心的な論点は、「近年の構築主義的な知見は『社会』がフィクションである」ことを暴露する<sup>(2)</sup>が、その結果として「『社会』は構築された相対的なものであって無根拠なものとして見えてしまう<sup>(3)</sup>」というジレンマであったように思われる。

社会学におけるこうした構築主義的な社会観の普及は、ニュータウン的な「都市空間」やコンピュータ・ネットワーク上の「仮想空間」など、「人工空間」(場所性や身体性から遊離した)の拡大と関連している。少々乱暴ないい方をすれば、「社会」が「構築された相対的なものであって無根拠なものに見える」とは、インターネット・ゲーム上に構築された「仮想社会」が無根拠なものに見えるのと同様であろう。また、最近の国際金融市場の巨大化をみればわかるように、こうした「人工空間」の拡大は、現在のグローバル化を過去のグローバル化と区別する最大の特徴でもある。一昨年のシンポジウムでは、「社会がフィクションである」という主張が「『社会は存在しない』ことを強調する新自由主義的な合理性ときわめて親和的なもの<sup>(4)</sup>」であるという問題提起がなされ、これに対し、近年の新自由主義的なグローバル化が「結果として『社会』を消失させるプロセスでもある<sup>(5)</sup>」という応答がなされた。グローバル化の問題も「社会の蒸発」と密接に関わっている。

このように整理すると、「社会の蒸発」とは、結局のところ近代化の帰結であることがみえてくる。つまり、近代化を、自然からの社会の離脱(=都市化)、社会からの家族の離脱(「核家族」化)、家族からの個人の離脱(=個人化)、そして身体からの意識の離脱(=「脳化」)のプロセス、として捉えるならば、個人化した空間から社会が蒸発するのは、ごく当然の成りゆきである。いくら巨大な人工空間をつくりあげたとしても、人間は生物の一種であるから、人間の存在の根は自然との結びつきのなかにある。社会の存立の根拠もまた、風土(生態)や身体などの物理的な次元によって支えられている。「社会の蒸発」とは、つまるところ、場所性と身体性に支えられた「生きられる社会」の希薄化ないし「共同性」の喪失・変容の問題であるように思われる。

こうした近代化のジレンマから抜け出すためには、逆のプロセスを考えることが必要であろう。つまり、肥大化した意識の身体への埋め戻し、個人の家族への埋め戻し、家族の社会への埋め戻し、社会の自然への埋め戻しである。もちろんそれは、すべてを埋め戻すということではなく、どこかでバランスをとり折り合いをつけるという意味での再埋め込みである。

ここでは、便宜上「自然」と「人工」を二項対立的に捉えてきたが、市井の人々の日常生活が営まれている地域社会においては、離脱と再埋め込みの二つの方向性が、さまざまな利害関係のなかでせめぎあっているというのが実状であろう。管見によれば、最近の地域社会学は環境社会学と結びつくことで、社会・自然環境・市場経済の相互関係を、ローカルな場でホリスティックに捉えるという方向へと進みつつあるように思われる。今年のシンポジウムでは、地域社会の現場に寄り添いつつ独自の議論を展開されている先生方をお招きして、「共同性」あるいは「公共性」の創造と再構築への展望を探りたい。

(研究活動担当理事 加藤 彰彦)

## 注

- (1) 「2004年度大会 シンポジウム趣旨説明」(「学会ニュース」第23号2004年4月17日発行)
- (2), (4) 「2003年度大会 シンポジウム趣旨説明」(「学会ニュース」第21号2003年4月23日発行)
- (3) 「2004年度大会 シンポジウム報告」(「学会ニュース」第24号2004年8月25日発行)
- (5) 「2003年度大会 シンポジウム報告」(「学会ニュース」第22号2003年9月25日発行)

## 3. 大会一般報告および『社会学年誌』第47号投稿の募集

申し込みを希望される方は、以下の項目をA4の用紙1枚に記入し、事務局宛てに郵送でお送りください。両方に申し込む場合には、それぞれ別の用紙で申し込みをお願いいたします。

大会一般報告、または『社会学年誌』第47号投稿、のいずれかを明記してください

- (1) 氏名
- (2) 所属
- (3) 郵便番号、住所、電話番号、FAX番号、E-mailアドレス
- (4) 題目(副題を別として25字程度まで)
- (5) 内容概略(200~400字程度)

大会報告：申し込み締め切りは、5月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。

『社会学年誌』投稿：申し込み締め切りは、6月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。

原稿の提出締め切りは、8月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。申込書提出後の題目、内容の大幅な変更は認められませんのでご注意ください。また、申込後に投稿を辞退なされる場合は、8月15日までにその旨を必ずご連絡下さい。

なお、分量、書式その他、投稿規定については、『社会学年誌』の最新号（第46号）をご参照ください。

#### 4. 2005年度研究助成の募集

これまでに当学会に寄せられた寄付金により、寄付者のご意思を尊重して、次の要項により会員各位の研究活動を助成いたします。

助成対象：早稲田社会学会の発展に寄与する研究活動  
助成額： 1件30万円程度を上限とする

助成を希望される方は事務局までご連絡ください。追って「申請書用紙」をお送りいたします。申請書の提出締め切りは、5月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。なお、「早稲田社会学会研究助成取り扱い要領」の規定により、「助成の直前の年度まで継続して2年以上の会員歴がある」方が対象となります。

また、この趣旨に賛同される方からのご寄付も募っております。寄付についてのお問い合わせは事務局までご連絡ください。

#### 5. 第24回研究例会報告

第24回（2004年度第2回）研究例会が以下のとおり開催されました。

日時： 2004年12月11日（土） 15:00-17:00  
会場： 早稲田大学文学部第二会議室  
報告者および報告題目： 坂田正顕（早稲田大学）「イギリス現代巡礼の光と影」

##### <研究例会報告>

第24回の研究例会は坂田正顕会員（早稲田大学）を報告者に迎えて12月11日に開催された（出席者約15名）。「イギリス現代巡礼の光と影」と題する報告の主題は、カンタベリー巡礼をはじめとするカトリック巡礼文化を近世に入って徹底的に駆逐したはずのイギリスで、いま、なぜ再び巡礼文化ルネサンスを迎えているのか、その複雑な事情について考察する、というものであった。報告では、坂田氏の現地フィールドワークによる研究成果が、豊富な資料や写真とともに紹介された。以下、報告の骨子を、筆者が理解した限りでまとめてみたい。

イギリスにキリスト教が伝播するのは6～7世紀のことであるが、これには、アイルランドに発してスコットランドのアイオナ、リンディスファーン、ダーラムなどを拠点とする北部ルートと、大陸からケント東岸の島やカンタベリーを経由してもたらされる南部ルートの2つがあった。324年に始まったエルサレム巡礼は、7世紀に入るとイスラム支配下で転機を迎え、代替巡礼地（写し巡礼地）の必要性が高まる。そのような背景によって、中世期のイギリスでは、チョーサーの著作で知られるカンタベリー巡礼やウォルシンガム巡礼が興り巡礼文化が隆盛する。やがてそれは墮落の途をたどり始め、宗教改革期になると聖地・聖人・聖遺物崇拜への批判によって巡礼文化は衰退

する。ところが19世紀に入ると、「オックスフォード運動」に端を発して国教会内部にカトリック化の流れが起きるといった宗教的事情や、交通手段の発達を背景とする近代ツーリズムの興隆（たとえばトマス・クックによる巡礼旅行の商品化など）によって巡礼文化は復興される。現代イギリスでは、中世巡礼の拠点となった各地の修道院廃墟が観光巡礼のスポットとなるなど、カトリック・国教会の2つの教徒を中心に巡礼文化が静かなルネサンスを迎えている。[聖地側(巡礼を)仕掛ける側、巡られる側)には各宗教会派間の微妙な勢力関係が根底に横たわり、いっぽう、「巡礼者側(巡る側、仕掛けられる側)」にも「伝統宗教」対「スピリチュアリティ」、あるいは「宗教性」対「脱宗教性」の拮抗関係がみられる。現代イギリスの巡礼は、それらの絶妙なバランスのうえに成り立っているといえる。

以上の報告に対して、出席者からは「近代ツーリズム」や「脱宗教性」、四国巡礼との比較などをキーワードに質疑が提起され、参加者のあいだで活発な議論が展開された。

(研究活動委員：榎本 環)

## 6. 第25回研究例会開催のお知らせ

第25回(2005年度第1回)研究例会が下記の要領で開催されます。

日時： 5月12日(木) 13:30-18:00

会場： 早稲田大学国際会議場第三会議室(総合学術センター内、3階)

報告者および報告題目：「モダニティの社会学理論」

Randall Collins 米国ペンシルベニア大学教授(社会学)・・・『超官僚制化としてのポストモダン』

Scott Lash 英国ロンドン大学教授(社会学)・・・

『reflexive modernization 理論から intensive modernity 理論へ』

### <主旨>

環境破壊、社会保障の再構築、宗教的対立とラディカリズム、少子高齢化、等々・・・わたしたちの社会は「豊かな社会」を実現した一方で、今日さまざまな問題に直面しています。こうした今日の問題が生じる原因の一端は、いわゆる「近代社会」あるいは「脱近代社会」と呼ばれる現代社会の成り立ちにその本源を有するといわれています。そこで、現在、世界の社会学界の第一線で活躍されているおふたりの社会学者(ランドール・コリンズ教授ならびにスコット・ラッシュ教授)をお迎えして、現代の社会を成り立たせている基本特性(そして、そこから派生する問題性)は社会学の理論的視点からどのように捉えることができるのか講義をしていただくことになりました。

質疑・応答の時間を設けてあります。また、英語から日本語への通訳、ならびに日本語から英語への通訳がつけます。また、どなたでも無料で来場できます。多数のご参加をお待ちしております。

主催：早稲田大学文学学術院・国際教養学学術院・早稲田社会学会

## 7. 第26回研究例会開催のお知らせ

今回の研究例会は、本年度大会シンポジウム「地域空間における共同性」のプレ企画として開催されます。多数のご参加をお待ちしております。

日時 2005年5月21日(土) 13:00-16:00

会場 早稲田大学文学部(戸山キャンパス)第四会議室(39号館4F)

報告者および題目

下村 恭広 氏 (玉川大学文学部専任講師): 「国家空間の重層的再編と地域社会」

概要: 都市・地域社会研究においてローカリティ、場所、空間といった語をめぐってなされている様々な議論を整理するとともに、これらが現在どのような同時代的課題において論じられるべき事柄なのかレビューする。

熊本 博之 氏 (早稲田大学院文学研究科博士後期課程):

「地域の混沌と社会運動 普天間基地移設問題を事例に」

概要: 本報告では、辺野古地域でのフィールドワークを通して得られたデータをもとに、生活環境主義の方法論を用いて、普天間基地移設問題に対する「地域の言い分」を提示する。その上で、移設に反対する社会運動が、「地域の言い分」とは異なる地点に立脚しており、それゆえに地域から乖離してしまわざるを得ない構造についても指摘する。

## 8. 入退会者のお知らせ

2004年12月11日の理事会において次の3名の入会が承認されました。

高橋 順一氏 (早稲田大学教育学部教授)      周藤 真也氏 (早稲田大学社会科学部専任講師)  
牧野 智和氏 (早稲田大学院教育学研究科)

2004年12月11日の理事会において次の2名の退会が承認されました。

与那国 暉氏 (琉球大学名誉教授)      内海 愛子氏 (恵泉女学園大学)

2005年3月26日の理事会において次の1名の退会が承認されました。

永井 広克氏 (富山国際大学)

## 9. 学会費納入のお願い

今年度の学会費を、同封の「郵便振替払込書」にてお振り込みくださいますようお願い申し上げます(発送事務作業の都合上、今年度分をすでに納入されている方、および名誉会員の方宛てにも同払込書を同封いたしますことをお赦してください)。

年会費: 一般会員 5,000円      学生会員 3,000円

口座番号: 00100-3-38020

加入者名: 早稲田社会学会

新年度にあたり、ご所属・ご連絡先等に変更がありましたら、その旨を通信欄にお書き添えください。

会費を3年分以上滞納されますと、2000年7月8日の総会決議および2000年12月16日の理事会決議にもとづき、会員資格の一部が停止されます(次の3つの権利が失われます。学会大会で報告すること 『社会学年誌』へ投稿すること 『社会学年誌』の配布を受けること)のでご注意ください。

以上